

2024年 3がら

マナ通信



今月のマナ通信

◎日々のみことば1月号 申命記、他
◎ローマ人への手紙 ロマ書3：20-25講解 からの感想です。

申命記は、およそ40年の荒野の旅の後、ヨルダン川東岸にて約束の地を目前にしたイスラエルの民に、モーセが遺言のように語った雄弁な説教が記されています。

彼は出エジプトを経験しなかった新しい世代の民が、約束の地でみこころに従って主の御栄光を現し、幸せに生きるためにシナイ山で与えられた律法を約束の地を目前にした時、新しい世代の民に教えたのです。」(2024年1月1日解説より)

エジプトを脱出したモーセを頭とするイスラエルの民は、神の援護に助けられ荒野を約束の地カナンを目指して進みました。男だけでも、およそ60万人、それに女、子供をあわせれば200万人はいたであろうと云われています。

選民は旅に疲れ、神を慕う心も薄れ「こんな事だったらエジプトに戻りたい」と不平、不満を言う者が現れます。そんな中、シナイ山で神はモーセを通して十戒をお与えになりました。神の教えが明らかにされたのです。

その後、向きを変えて北に向かいます。約束の地カナンの入り口であるカデシュ・バルネアまで、約240km徒歩で11日の道のりにもかかわらず、なんと38年もの月日を費やしてしまいました。

これは、神への不信仰が原因であったのと、偶像礼拝に誘惑されないように神の御口からでる全てのことで生きる訓練のためでした。そして、この地で今から行こうとしているカナンに偵察隊を送ります。12名で編成され10名は帰って来て言うことには、とても攻め落とせるものではない、先住民は巨人であるし、城壁もがっちりしている。しかし、残る2人は、果物もよく熟れ、蜜がしたたる良い土地だと報告します。

それを聞いて住民は人間的な判断をして恐れおののきます。それは神が幾重にも励まし、必ず約束の地を与えると云われたのに従わず逆らったからです。結果彼らは神の怒りを受けて荒野の旅で死に絶えます。良い知らせをもたらした2人の名は、神に従い通したカレブと、モーセの後継者として立てられたヨシュアでした。

カデシュ・バルネアに1年程、滞在して出発します。しかし、一隊はヨルダン川の東側を通ります。エドムは神がヤコブの兄弟エサウに与えた土地なので迂回します。そして、モアブ、アモンは神がロトに与えた土地なので争いません。しかし、北のヘシュボンの王シホンと、バシャンの王オグとの戦いでは神を味方につけての戦いで勝利します。

しかしまたしても、世代交代をして若返った選民イスラエルはモアブの地で偶像礼拝に走ります。それは、ペオル山で礼拝されていたバアルを拝み、モアブの娘たちと不品行をしてさばかれ、24000人も滅ぼされました。しかし、生存者、生き残った者もいたのです。神の掟(御声)に従うか否かが問題でした。

そして、モーセは祈りました。どうかヨルダン川の向こうの約束の地に入れますように、しかし、神の答えは次の聖句のようだったのです。

「私はそのとき、ヨシュアに命じた。「あなたは、あなたがたの神、【主】がこれら二人の王に対して行われたすべてのことを、自分の目を見た。【主】は、あなたがこれから渡って行くすべての国々にも同じようにされる。彼らを恐れてはならない。あなたがたのために戦われるのは、あなたがたの神、【主】であるからだ。」私はそのとき、【主】に懇願して言った。

「【神】、主よ。あなたは、あなたの偉大さとあなたの力強い御手を、このしもべ



に示し始められました。あなたのわざ、あなたの力あるわざのようなことができる神が、天あるいは地にいるでしょうか。どうか私が渡って行って、ヨルダン川の向こう側にある良い地、あの良い山地、またレバノンを見られるようにしてください。」しかし【主】はあなたがたのゆえに私に激しく怒り、私の願いを聞き入れてくださらなかった。【主】は私に言われた。「もう十分だ。このことについて二度とわたしに語ってはならない。ピスガの頂に登り、目を上げて西、北、南、東を見よ。あなたのその目でよく見よ。あなたがたのヨルダン川を渡ることはないからだ。ヨシュアに命じ、彼を力づけ、彼を励ませ。彼がこの民の先頭に立って渡って行き、あなたが見るあの地を彼らに受け継がせるからだ。」(申命記3:21-28)

神様は、約束の地に入らせてくださいというモーセの嘆願を拒絶し、ヨシュアを後継者として立てるよう命じられました。これは人に与えられたことは、他人とは違う自分の分を果たすことなのです。自分に与えられた神の賜物を果たせるよう神が導いてくれるのです。(畑中伸之)

福音には神の義が啓示されていて、信仰に始まり信仰に進ませるからです。『義人は信仰によって生きる』と書いてあるとおりです。」(ロマ1:17)

「しかし今や、律法とは関わりなく、律法と預言者たちの書によって証しされて、神の義が示されました。すなわち、イエス・キリストを信じることによって、信じるすべての人に与えられる神の義です。そこに差別はありません。」(ロマ3:21-22)

上記の聖句には「神の義」という言葉が繰り返されています。1章17節で「神の義」と言わないで「救いの道」と言っても、十分意味が通じることを、「神の義」と言っていることに意味がある、との説明がありました。

私たちは「救い」と言うと、すぐ「神の救いの恵み」というように「恵み」を連想しがちです。神の恵みによって救われるわけですから当然と言えば当然なのですが、しかし、聖書は「恵み」の前に「義」を持ち出します。福音の本義について述べている3章21～31節のところでも繰り返し「義」が出て来ます。

キリスト教の核心であるこの福音というのは、この義の上に成り立っているものであることを覚えなければなりません。「神の義」が犯された以上、この現状回復は神の義が満たされること以外にないわけで、神の義が満たされるために「キリストの贖い」があったことが分かります。

アダムにあって墮落し、罪人となった私たちは、神の義を満たすことができない者たちになっています。ですから、救いは、神様からのわざによるしかありません。事実、神様が用意して下さいました。

全聖書は、ただ1つの救いについて、つまりイエス・キリストの福音について記しています。それはイエス・キリストが私たちの罪を十字架で贖って下さったことに基づく福音です。

感謝なことに、このイエス・キリストを信じる人は、だれでも、神が受け入れてくださるのであり、イエス・キリストが神の義を満たして下さったことによって、神は満足なさいました。

イエス・キリストが満たして下さった義を感謝し、信仰によって受け入れる人はだれであっても救っていただくことができます。神様が用意して下さいました救いの道を感謝して歩みます。(福島三弥子)



マナのみことばは、申命記から始まりました。

申命記3章のルベン族・ガド族・マナセの半部族にヨルダン川東岸の肥沃な牧草地を与え、他の部族のためにヨルダン川西岸を取る戦いに3部族の男子は参加した。

神様は家畜を沢山持っている部族に相應しい土地を与えました。神様は必要な所に相應しい物を与えて下さるお方です。公平なお方です。他人を羨んだりせず、与えられた賜物に感謝することを、しっかりと、覚えたいです。

申命記8章2節「あなたに分らせるため」の解説で、試練は、それまで気づかなかった自分の本性を暴くのですとあり、納得です。

困ったときどうしても慌てふためく己の性格を、嫌っています。試練は主の語りかけであり、試練の先には祝福があるとの言葉に、慰めと勇気を頂きました。(広瀬裕子)



マ書8章冒頭に「今は、キリストにある者が罪に定められることは決してありません」と、はっきりと断言してくれています。そして、それに続く3節「神はご自分の御子を、罪のために、罪深い肉と同じような形でお遣わしになり、肉において罪を処罰されたのです」と、御子が私たちの身代わりとなって罪を処罰して下さったことを、はっきりと証立立ててくれています。

なんということを罪人のためにされたことでしょうか！ 自分がどういうものを少しでも知っている者なら、このことばに、どんなに感激することか。これほどの事をして、私たちが罪のさばきから解放し、神との関係を回復させ、そして新しいいのちによって新生させて下さったのです。

なので、人から責められた時には、その人に心から謝罪したり、誠実に(言葉だけに終わらずに)対応するなりした後で、この事のためにも主が十字架にかかって下さったと、十字架を見上げて罪の赦しを感謝したいと思います。そして、新しくいただいた御霊様と交わりつつ歩んでゆきます。(高橋美枝)

あなたの神、主がこの四十年の間、荒野であなたを歩ませられたすべての道を覚えていなければならない。それは、あなたを苦しめて、あなたを試し、あなたがその命令を守るかどうか、あなたの心のうちにあるものを知るためであった。」(申命記8:2)

荒野での生活は、イスラエルの民の心のうちにあるものを知るためであったと書かれています。人は極限状態になるとその本性が現れると言いますが、苦しい荒野での生活で、人々は水がないと言い、パンがないと言い、肉が欲しいといました。

民から不平不満の出るたびに、主は岩から水を出し、天からマナを降らせ、うずらの群れを用意して下さいました。

苦しい荒野の生活も、飢えもせず、衣服はすりきれず、足は腫れなかった、と振り返れば主のご配慮を知ることができました。

現代の私たちも同じように、楽あれば苦ありで実に様々な事が起こりますが、振り返れば、苦境に立たされる度に主に助けを求めて、順境では味わえない喜びを味わわせて頂くことが多いです。

それは心の奥深くに静かに灯るような喜びです。神様のご配慮により、あらゆる経験を通して主の道から外れずに歩ませて頂いていることに感謝します。

(永井亮子)



しかし今や、律法とは関わりなく、律法と預言者たちの書によって証しされて、神の義が示されました。」(ロマ3:21)

今や、神は別の救いの道を示して下さいました。

その新しい道は、「善人になる」とか、律法を守ろうと努力するような道ではありません。神は今、「もし、あなたがたがイエス・キリストを信じるなら、あなたがたを受け入れ、罪のない者と宣言する」と言われ、どんな人間であろうと、私たちはみな、キリストを信じるという、この方法によって救われるのです。

すべての人は罪を犯したので、神の標準には、ほど遠い存在です。けれども、もし私たちがキリストを信じ受け入れるなら、恵みにより、無償で私たちの罪を帳消しにしてく下さるのです。神はキリスト・イエスをつかわして、私たちの罪に対する償いをさせ、私たちへの怒りをとどめて下さいました。

救いの道を用意して下さったあとは、それを感謝し、信仰によって受け入れる人は、たとえだれであっても、救っていただくことができます。私たち人類の救いの道は、永遠の昔に神が用意して下さいました。(木村邦夫)



ただ、神の恵みにより、キリスト・イエスによる贖いのゆえに、価なしに義と認められるのです。」(ロマ3:24) 私は、無力で、何の望みもない者ですが、ただ、神の恵みによって私を救って下さいました。〈律法〉が与えられたのは、人を救うためではなく、むしろ、「養育係」として人を《救い主》に導くためである。と教えられました。

その《救い主》イエス・キリストが私の罪を贖って下さったのです。価なしに義と認めて下さるとは、何という恵みでしょうか。感謝するばかりです。(外處トミ)

さまざまな 試練を受ける その度に
主のあわれみと 導きを知る
2024年1月31日



群馬県桐生市 梅田湖の蠟梅

すべての人は、罪を犯したので、神からの栄誉を受けることができず、ただ、神の恵みにより、キリスト・イエスによる贖いのゆえに、価なしに義と認められるのです。」(ロマ3:23-24)
 神様の恵みによって私たちの罪がゆるされ義と認められるとはなんと感謝なことでしょうか。
 自分の無力さに打ちひしがられるのではなく、主に信頼して日々歩んでいきたいです。(外處光歩)

ただ、神の恵みにより、キリスト・イエスによる贖いのゆえに、価なしに義と認められるのです。」(ロマ3:24)

義認は、私たちが何かを行ってもたらされることではなく、私たちに関して神様が行われる一つの宣言であり、私たちが今、現在このとき、信仰を行使する瞬間に義と宣言されるということを教えていただきました。

自分自身を眺めたり、自分自身を頼りにしたりするのではなく、神様から全く無償の救いという賜物を与えていただいたことに感謝して、主に心を向けて歩んでいけたら幸いです。(外處結実)



それでは、私たちの誇りはどこにあるのでしょうか。それはすでに取り除かれました。」(ロマ3:27)

人は自分が愛する人や自分を愛して欲しい人のために、何らかの良いものを与えたいと思うものです。そして、相手に喜ばれることができると、自分の思いが報われたことを嬉しく思うと同時に、自尊心も高まってしまうのかもしれない。

しかし、その根強い人間的な習性が、救いの面においては、全く約に立たないものであることを示されます。さらに、神様に対しては自分自身の力では何もできず、全く役に立たず、逆にいつも自分の愚かさを謝罪し続けている日々を過ごしていることに気付かされます。

神様の前に己の自尊心は全く存在することはできず、日々、主イエス様が犠牲となって私の罪を贖って下さったと信じる以外に、希望は無いことを深く知るので。

「恵みは、全く神の愛からのみ生じる。決して私たちのうちにある何かによってもたらされるものではない。」のは確かだと認識し、そして、「恵みは私たちの有り様とは全く逆を行くのである。」ことを深く理解させられる日々を歩まされています。

この世界の全ての理不尽も神様の許容の中で起こっているのかもしれませんが、自分の試練に関しては全て神様の御手の中にあることを覚え、神様のあわれみと御愛と恵みと希望のすべてに感謝するばかりです。(外處徳昭)

神の恵みにより、キリスト・イエスによる贖いを通して、価なしに義と認められるからです。神はこの方を、信仰によって受けるべき、血による宥めのささげ物として公に示されました。ご自分の義を明らかにされるためです。神は忍耐をもって、これまで犯されてきた罪を見逃してこられたのです。」(ロマ3:24-25)

キリスト者にとってヨハネ3章16節は有名ですが、ロマ3章24節も劣らず有名です。この24節は、3つのことが述べられています。第1は「救いとは何か」、第2は「この救いはいかにして私たちのものとなるか」、そして第3は「この救いは、いかにして可能となったのか」です。

まず、第1の「救いとは何か」ですが、「救い」は「義と認められる」ことです。それは、「神様が私たちを義であると宣言して下さることであり、私たちが義と変えるという意味ではなく、神が私たちが義とみなし、私たちが義と宣言される」という意味だということです。

私は理解できませんでした。自分を見て、「内側に罪があるのを感じる、だから義と認められた状態にあるはずはない」と考えていました。

しかし、「義認」は、私たちの中に何か変化を起こすことではありません。「義認」は、私たちに関して「神が行われる宣言」だということです。それも、私たちが今、信じた瞬間に、義と宣言されるということです。

ローマカトリック教徒として育てられたルターは、現世で救いの確信を持つことなどできないと教えられて

きたそうです。しかし、ルターは、この「信仰による義認」という教理を理解させられた時、悟ったそうです。これは現在、今すぐ可能なことなのだ、と。その結果、ルターは喜びの霊に満たされ、自分の救いを確信したと言います。



第2は「この救いはいかにして私たちのものとなるか」です。2つの言葉、「価なしに」と「恵み」によって表現されています。

ありがたいことに、救いは、「価なしに、神の恵みによって」私たちのもとにやって来ます。それは賜物であり、全く無償のものだということです。救いは神様からの「賜物」です。

「恵み」は、功なくして得た恩顧、何の値打ちもない者に施された慈愛を意味します。救いは、価なしの賜物であるだけでなく、まるで逆のものに値していた者に対する、価なしの賜物です。何とありがたいことでしょうか。

第3は「この救いは何によって可能になったのか」です。それは、「……キリスト・イエスによる贖いを通して」とあります。

「贖い」という言葉は、新約聖書で10回用いられていますが、7回はパウロの書簡で、2回はヘブル人への手紙で、そして1回はルカ福音書で用いられています。

「贖い」とは、「代価を払って買い戻すこと」を意味します。人間はみな、最初の人・アダムにあって罪の奴隷となりました。しかし、主イエスは罪の奴隷市場から私たちを買い戻すために来られました。私たちが悪魔によって捕らわれていた牢獄は開かれ、奴隷であった私たちは自由にされました。

私はこれまで、24節の「神の恵みにより」とか「価なしに」という言葉で、「ああ、ただだ、無償なんだ、ありがたい」と軽く考えて読んでいましたが、無償とするために、背後で、神様の側でどれだけ大きな代価を支払われていたのかを、あまり考えていませんでした。

私たちに支払えない代価を被害者である神様が加害者である私たちのために、大事な大事な愛する御子を「なだめの供え物」としてあのカルバリの十字架に釘づけられたということです。

被害者であられる神様が、こともあろうに加害者のために犠牲を払い、加害者を救済して下さるという驚くべきことをしてくださったのです。

父なる神様は、十字架で苦しんでいる御子の姿を見て、泣いて苦しんでおられたのではないのでしょうか。改めて岩淵まことさんの「父の涙」を思い出しました。神様の計り知れないご愛を覚えて感謝です。(福島勲)

父の涙 (by 岩淵 まこと)	
①心にせまる父の悲しみ 愛するひとり子を十字架につけた 人の罪は燃える火のよう 愛を知らずに今日も過ぎて行く 十字架からあふれ流れる泉 それは父の涙 十字架からあふれ流れる泉 それはイエスの愛	②父が静かにみつめていたのは 愛するひとり子の傷ついた姿 人の罪をその身に背負い 父よかれらを赦してほしいと 十字架からあふれ流れる泉 それは父の涙 十字架からあふれ流れる泉 それはイエスの愛
https://www.youtube.com/watch?v=QZpP_POnbX0	
	十字架からあふれ流れる泉 それは父の涙 十字架からあふれ流れる泉 それはイエスの愛

貴重なご感想をありがとうございました。
 次回は「日々のみことば」2月号か「ローマ人への手紙(3:25-31)」からの感想を3月10日までに福島兄弟にお寄せください。(畑中)